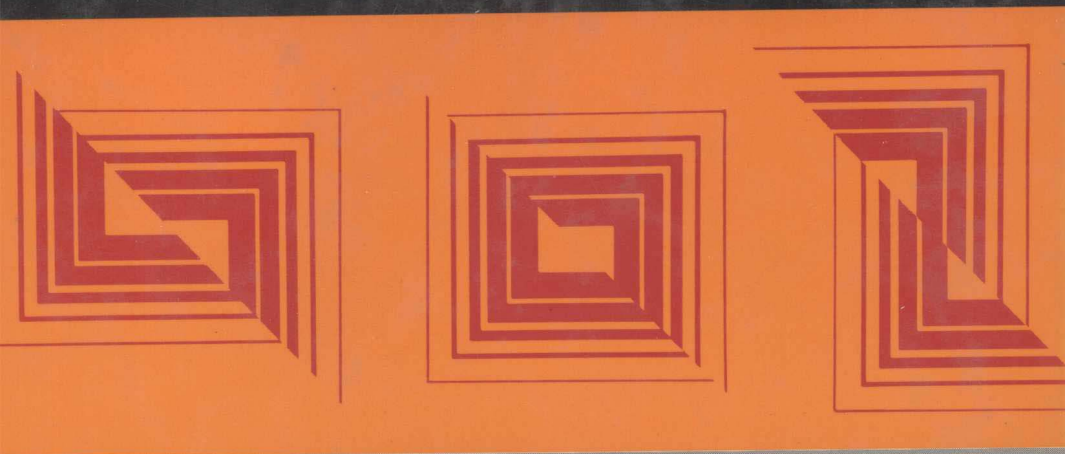


経済学と 経済問題 上

ジェームスF・タッカー著

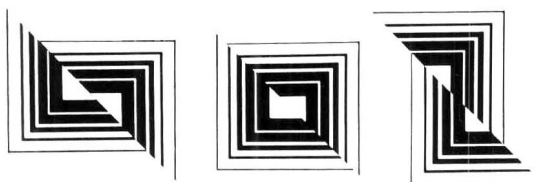
梶谷正光訳



経済学と 経済問題^①

ジェームスF・タッカー著

梶谷正光訳



●著者紹介

ジェームス・F・タッカー
(James F. Tucker)

1924年ニューヨーク州ブルックリン生まれ。'47年ハウアード大学を卒業，'48年同大学修士。1957年ペンシルバニア大学より経済学博士号を取得。

1965年米国労働省エコノミスト，'68年ヴァージニア州立カレッジ学長，'70年ヴァージニア工芸大学兼ヴァージニア州立大学教授を歴任。リッチモンド連邦準備銀行理事。

●訳者紹介

梶谷正光 (カジタニ マサミツ)

1922年生まれ。1946年東京商科大学（現一橋大学）卒業。現在第一経済大学教授・学長。

経済学と経済問題・上巻

<換印廃止>

昭和55年4月30日 初版発行

定価3,000円

著者 J. F. タッカー

訳者 梶谷 正光

発行者 小野沢 公男

©1980 Printed in Japan

発行所 学校法人 産業能率大学出版部

東京都世田谷区等々力6-39-15

電話 (704) 1111 (大代表)

振替口座(東京) 0-44404

(乱丁・落丁はお取り替えいたします) 印刷 芳山印刷 製本 協栄製本
2034-04643-2752

序文

本書は、とくにつぎのような人たちのために書かれたものである。すなわち経済学を、また現代アメリカ経済のいくつかの難しい論点と問題の背景を、相応に理解しようとする人たちへである。本書は、アメリカ経済体制をよりよく理解するための根拠を広範囲にわたって提供しているばかりではない。この経済体制について、より効果的な意思決定をするうえに必要な基本用具をもまた提供している。その論議の多くは、つぎのような想定に立っている。すなわち、各人は自分がある程度自分独自の経済学者として行動するに違いない——個人生活において、また国民として——との想定に立つ。各人が充分に知識があつて、現在と将来にわたる重要な経済問題について、これを客観的立場から考えることができるでしょう。その場合、個人も、また社会も、ともに暮し向きがよくなるだろうと想定しているのである。

入門経済学のたいていの教科書と同様に、本書でもまた、留意していることは、経済問題について、これを入念に、かつ論理的に考察するのに必要な分析概念を展開することである。しかし、なおいつそうの注意を払っているのは、すべての国民が多分よく知っているはずのもっと重要な経済事実と経済制度についてである。この論議の一部をさいて、アメリカ経済史のなかで、もっとも意味合いの深い問題点について読者の記憶を新たにすることを目的とすることに当てている。また、本書には、アメリカの経済生活に現在も生きているいくつかの論争の的となつている論点について、これを理性をもつて論議するよう、その喚起を意図した部分がある。

この教科書の題材の主要題目のすべては、教室あるいは討論集会での使用に適応するように扱われている。なぜならば、この本の主要目的は、学生も、社会の成人も、経済問題についての「ものの考え方」を養うのに、そ

の助けとなることをただ願うからにはかならないからである。経済学研究を生涯の仕事とし、あるいは将来いつの日か技術上の経済調査に携わることを意図している学生は、さらに資料を付加して、本書を補ってもらいたい。

多くの人の参加を得て、本書を結実させることができた。この企てを試みるについての多くの示唆を、私の恩師の方々に頂いた。とくに、マルチン・ウォルフ (Martin Wolfe)、H・ネイラー・フィッネウ (H. Naylor Fitzhugh) の両教授から頂いた。原稿について、貴重な示唆を、私のもとの同僚であるヴァージニア工芸大学 (Virginia Polytechnic Institute)、ヴァージニア州立大学 (Virginia State University) のジュームス・M・ブッチャナン (James M. Buchanan)、ゴードン・タロック (Gordon Tullock)、A・J・レロ (A. J. Lerro) の諸教授から頂いた。なお、クレアモント大学 (Claremont College) のW・クレイグ・スタブルバイン (W. Craig Stubblebin)、テキサス教育大学 (Texas Tech University) のルイス・E・ヒル (Lewis E. Hill) の各教授、ウィチタ州立大学 (Wichita State University) のパーチン・ペルリン (Martin Perlman) 博士、オハイオ州マイアミ大学 (Miami University, Ohio) のロイド・アトキンソン (Lloyd Atkinson) 教授、ミズリー南部州立大学 (Missouri Southern State College) のL・ケイス・ラリモア (L. Keith Larimore) 教授に原稿を見て頂いて、貴重な示唆を頂いた。

以上あげた方々のほかに、私の仕事上の計画を調整し、この種の努力を完結させるのに必要な資料を提供して頂いたヴァージニア工芸大学とヴァージニア州立大学に感謝の意をささげる。終わりに、プレンティス・ホール社の編集と営業の部員の方々が、激励して下さり、協力して頂き、時宜をえた示唆を与えて頂いたことに対して、感謝申し上げる。この激励、協力、示唆がすべて、この冒険ともいえる仕事を終結させるのに、大きく役立った次第である。

ジュームス・F・タッカー

日本語版への序文

本書は本来、基礎経済学に関する意味深遠な知識と、現代世界における重大な経済論争および経済問題の理解にとって有効な背景を探究せんとする人々のために書かれている。

このような経済学の基本的方向づけをもつということは、責任ある市民たるに必要な準備であり、かつまた、効果的意思決定にとって立証ずみの用具になると確信する。しかしながら私は、もしすべての個人が、経済問題についての正しい情報を得られるならば、それぞれの個人なりコミュニティはよりよい恩恵にあずかれることを明らかにしようと特別な努力を払っている。更にはまた、本書の中の総論と各論にはすべて、どうしたら経済学が毎日の生活における思考と意思決定のいずれにも役立つかについて、根元的な論題をつけている。

本書で使われている資料はすべて、アメリカ経済の動向と経験に関連するものばかりであるが、その分析概念は、市場経済を容認するコミュニティならどのコミュニティにも適用されうるといえる。日本の最近の経済的経験は、市場経済の最高の成功例を意味しているが、それなればこそ、本書の日本語版が日本における経済学教育の教材として出版されるということは、極めて時宜を得たものであり、私にとってもこのうえない光栄である。日本における経済活動の歴史的・制度的環境が、アメリカのそれとは異なることも確かである。しかしながら、両国は基本的経済制度と機構の面で多くの共通点をもっており、両国はともに同じような経済問題と政策論争に直面している。

本書での論議に一貫して採用されている戦略は、読者の経済問題についての「思考方法」の開発の手助けになるようデザインされている。日本の読者の皆さんが、この戦略から得るところ大であって、また経済問題に関する皆さんの慎重にして論理的な思考が、今後とも地球上でもっとも進歩的な日本経済にとって支援の源泉として役立つであろうことを確信してやまない。

多くの人々が本書を完結させるために温かい手を差し伸べてくれた。本書の執筆を試みんとするに当って、多大の示唆を与えて下さったのが私の恩師、とりわけペンシルバニア大学のマルチン・ウオルフ教授とハウアード大学のH・ネイラー・フィッユ教授のお二人であった。またヴァージニア工芸大学と州立大学の以前の同僚たちからも、多くの貴重な示唆を得た。しかしながら、本書の日本語版に関連しての最大の貢献が、著名な学者、梶谷正光教授の手になる洗練された翻訳にあることはいまでもない。

前記の方々たちに加えて、私は私の執筆努力の完結に不可欠であった各種資料を提供して下さいたヴァージニア工芸大学と州立大学、およびリッチモンド連邦準備銀行とに対して、心からなる感謝を申し上げたい。そしてまた、日本の読者の利用に供するため、日本で原作原稿の日本語版を出版するという卓抜なる洞察力を現実のものとしたプレンティス・ホール・インターナショナル社と産業能率大学出版部に対して、厚くお礼を申し上げます。

一九八〇年二月九日

ヴァージニア州リッチモンド市、リッチモンド連邦準備銀行にて

ジェームス・F・タッカー

訳者まえがき

私がこの書を手にしたのは、その出版直後一九七五年の暮のことであった。当時、私は教養課程の経済学の講座を担当していた。

私は、学問は論理的であると同時に、歴史的でなければならぬと、かねがね考えてきた。因果律による法則のみで、経済現象を解明できるかという疑問がしばしば頭のなかに台頭していた。

経済現象を歴史現象の一側面として「文化」一般との関連において、これを学生諸君に講述することに、私なりに腐心していた。

そういったときに、この著作にめぐり会ったわけである。主要経済制度に関する叙述といい、経済諸事実に関する説明といい、これあるかなという感を深くした。「韋編三絶」、私なりにこれを読んだ。そこには、アメリカ実態経済の把握と、その理論の展開が平行して行なわれていることが、ますます明瞭になってきた。

かくして、学生諸君のために、訳出を思い至った次第である。

原文の理解と日本語の表現において、不備の点があると思う。大方の寛恕を請う。

アメリカ実態経済のなかにおける「一回かぎりのもの」が、大切に切り扱われている。そして、この「一回限りのもの」が、アメリカの経済の歴史現象のなかの「転換点」となっているものについても、言及されている。

この訳出に当っては、創価大学教授紅林茂夫先生の勸奨を頂いた。また、翻訳の手続きについては、第一経済大学教授倉井武夫先生のお手をわずらわした。さらに産業能率大学理事広田寿亮先生、同大学出版部小野沢公男氏、粕谷正利氏に一方ならずお世話になった。あわせて、第一経済大学助教授岩永房夫、井沢良智両先生に校正の労をわずらわした。おわりに、医学博士大石弘之先生ご夫妻の陰陽両面にわたる励しがなかったなら、この本は上梓できなかったであろう。以上の方々へ、厚く感謝の意を捧げたい。

最後に、ルナールの「制度観」を通じて「制度」というものについて、私に目を開かせて頂いた今は亡き恩師、東京商科大学教授米谷隆三先生の霊前に、この書を捧げたい。

原著者J・タッカー氏が、日本語版への序文を寄せて頂いたことは、私にとって大きな感謝である。

昭和五十五年三月

梶 谷 正 光

上巻・もくじ

序 文

日本語版への序文

訳者まえがき

第一篇 経済学とアメリカ経済序説

第1章

経済学の特質

経済学という学問 6

経済学を理解することの必要性／経済分析の役割／経済学の分科

経済体制 16

アメリカ経済体制／体制の目標

経済政策 20

アメリカ経済政策／政策の諸問題とその手段

要約 22

討論のための問題／小論文のための討論

アメリカ経済の発展

農業経済からの浮上 29

工業主義の勃興 32

工業の発展／傑出した人々／大量生産と大量消費／雇用の再編成

サービス経済へ向かって 46

第二次大戦前／戦後の時代／サービス部門へ転換の理由／サービス経済のもたらす結果

生産性 54

その他の諸変化

要約 57

討論のための問題／小論文のための討論

主要経済制度

法人企業 62

現代の構造／株式／会社と結合／株式会社と公共福祉

組織労働者 70

労働組合の成長／労働立法／労働関係／組合が与えた影響

企業としての政府の機能 79

国防／その他の活動／州および地方政府／経済上の意義

要約 88

討論のための問題／小論文のための討論

第Ⅱ篇 市場志向経済

第4章

市場経済

需要理論 97

需要の決定要因／需要の変化

供給理論 102

供給の決定要因／供給の変化

市場価格 107

価格の弾力性 109

競争 111

価格競争／独占と寡占／競争の推進／介入

政府の役割 122

要約 123

討論のための問題／小論文のための討論

第5章

費用と生産費

会計費用と経済費用 130

会計費用

固定費と変動費 133

固定費／変動費／限界費用／費用と利潤

費用便益分析 139

定義と測定の問題／方法の適用

要約 143

討論のための問題／小論文のための討論

第6章

所得の分配

所得の機能別分配 150

賃金、俸給所得 151

労働需要／政府の影響／労働組合／動機づけ

利子、地代、法人利潤 158

利子／地代／利潤

農業所得 161

合衆国における個人所得分配 163

集団間の分配／個別家族所得／家族所得への影響

貧困 168

貧困の測定／現在の状況／所得の不等

要約 173

討論のための問題／小論文のための討論

第7章

消費者

個人消費支出 176

その国民類型／その家族類型

消費者行動 179

他の手法／広告の役割

消費者信用 183

消費者金融の形態とその根源／信用費用

消費者の諸問題 190

消費支出の計画化／購買慣習の改善／消費者保護／金融資産管理／生活費

要約 202

討論のための問題／小論文のための討論

第Ⅲ篇 経済活動の水準

第8章

経済活動の流れとその測定

経済過程の特質 209

流れの中の調整

国民所得と生産高 219

国民総生産（GNP）／輸出品と輸入品

GNP に対する研究方法 224

その他の経済活動尺度 226

GNPの評価

要約 230

討論のための問題／小論文のための討論

第9章

雇用の決定

雇用についての古典派理論 235

総需要の重要性 237

消費／投資／政府支出／純輸出／連邦政府の役割／その他の要因

失業者 245

失業者の測定／失業者の分類

失業の諸要因 250

失業を理解するうえでの重要要因／失業の理由／失業救済策／超過失業

完全雇用 255

要約 257

討論のための問題／小論文のための討論

經濟變動

景氣循環 262

不況／回復／好況／景氣後退

景氣循環に関する理論 265

外部原因説／内部原因説／総合結論

その他の關係變動 269

インフレーション 272

新しい類型／インフレーション期待／"しのびよる"インフレ／インフレーションの不利
益／今日までの対抗措置

要約 279

討論のための問題／小論文のための討論

金融と銀行制度

貨幣の本質と機能 284

要求払い預金／現金通貨

通貨の及ぼす影響 288